
ねえ君は

北未知 はねま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねえ君は

【Nコード】

N5172A

【作者名】

北未知 はねま

【あらすじ】

私にはジュンという弟がいる。ジュンには私の心の中が読める不思議なところがある。ある日、弟の友人と名乗る男に襲われそうになるが、ジュンに助けられた。そいつの正体を知っていたジュンに問いつめると、神様が地上に住んでいた時代、私とジュンの関係が恋人同士で、その仲を女神様が嫉妬して永久に結婚できないようにさせられたことを語った。姉弟として生まれ変わっても私を狙う存在に目を光らせていたジュン。私の記憶が戻って一緒にいられなくなることを恐れ、封印していた。が、もうすでに遅かった。記憶は

蘇り二人は再び恋人のように抱きしめあった。そしてジューンは消えた。だが、私の記憶にだけ存在する。

（前書き）

初めての作品です。頑張って書きました、よろしく願います！
一人でも多くの方に読んで頂けますように・・・。

私には年子の弟がいる。小さい時は泣いてばかりで、すぐにお母さんの後ろに隠れていた。遊びに行く時は必ずついてきて、友達には結構可愛がられていたと思う。黒目がちな瞳に小さな引き締まった口と鼻は、誰が見てもかわいいと口に出してしまうくらい、そう、そんな弟の存在が嫌でならなかった。

「ねえ待って、ジュン！靴ひもがほどけた！」

「しょうがないなあ、早くしないと遅刻するぞ」そんな私も、現在弟とは友達のような間柄になった。私はいつのまにか、弟といえる時が一番楽しいと感じるようになっていた。あんなに泣き虫だったジュンが、まさかこんなに変わってしまったとは・・・ずっと一緒に成長した私でさえ、不思議でならない。

「・・・ほら行くぞ」

靴ひもが結ばれたことを確認するや、私の手をつかんで走り出した。「ちよつと、早すぎー！！」

足の遅い私だが、ジュンと並んで走ると、景色がいつもよりも早く流れているような気がする。

あつというまに校門をくぐり、私達はその場で呼吸を整えた。

（もつと走っていたかったな）

「え、何か言った？」

ジュンが鞆を肩に担いで立ち上がった。

「何も言っていないよ！」

私はちよつとびくりして、まだ早い呼吸を無理におさえながら口ッカーに向かった。ジュンは時々、なぜか私の心の中を読んでいることがある。私はその度に否定しなければならない。というのも、

もしそうだと分かってしまったら、いつでも自分の考えを知られてしまうから。

「笹井く〜ん、お早う」

ジュンの彼女のミユキさんだ。ジュンと同じクラスで、私にとってはクラブの後輩でもある。

「あ、笹井先輩、お早うございます」

「お早う、今日も遅刻はまぬがれたみたい」

私はそう言って、さっさと靴を履き替えて教室に向かった。背後で、二人の楽しそうな会話が聞こえてくる。階段を小走りであがると、笑い声はやがて消えていった。

今日はクラブもないので、まっすぐ家には帰らずに、駅のそばの本屋に立ち寄った。

毎月買っている漫画の雑誌がもう出ているはずだ。雑誌のコーナーで探していると、誰かに見つめられているような落ち着かない雰囲気思わず周囲を見渡すが、本を読んでいる姿しかない。

（気のせいかな・・・）

お目当ての雑誌を見つけてすぐにカウンターに向かった。

店員に雑誌を渡していると、

「うまそうな女だなあ〜、ギヒヒヒヒ」

背後で金属を引っかいたような耳障りな声が聞こえてきた。

「お会計590円です」

店員には聞こえなかったのか、すました顔でレジを見ている。

私は慌てて鞆から財布を取り出し、お金を渡した。

「あとで骨まで食ってやる、ギヒヒヒヒヒ！」

鞆に雑誌と財布を入れる時に後ろをそっと見たが、怪訝な顔で立っているサラリーマンらしき男がいるだけだった。私は怖くなって足早に本屋を出た。そして出来るだけ人の多い所を選んで家に向かったが、どうしても一カ所だけ寂しい場所を通らなければならな

った。

（ま、夜じゃないんだし、さっさと通ればいいんだ）

この通りをまっすぐ行けば、突き当たりを右に曲がったところに住宅地が並ぶ。ただ、通りの右側は建設を中断している工事現場の空き地で、左側は封鎖された小さな工場があるだけだった。

なぜか握り拳を作りつつ、歩を早めた。通りの半ばまで来ると少しホッとする。

「ねえ君、ちよっと待って」

「わあゝ！食べないで！！」

ふいに肩を叩かれたので、私はとっさにしゃがみ込んで頭を抱えた。でも、よく考えると声が違うような・・・。

そつと見上げると、学ラン姿の男の子だった。小脇に不似合いな雑誌を挟んでいる。

「それ、私と同じ・・・」

「これ、君が落とした雑誌だよ、鞆に入れるつもりが落ちたみたいだね」

そう言って私に差し出した。わざわざ追いかけてくれたみたいだ。その学生はジュンと同じ制服、つまり私と同じ学校の生徒だった。

「ありがとう、危なく大損するところだったわ」

そうそう、お小遣いがパーになるところだった。

「君のことは知ってるよ、笹井ユイカさんだよね」

私那不審な顔を見ると、慌てて弟の友人だと言った。

「名前は何ていうの？」

「春木トオル、クラブも同じなんですよ」

ジュンは小学校の頃から剣道をしている。学校の話は家でもよくするんだけど、こんな友達がいたなんて知らなかった。きつとミユキさんなら知っているんだろうな、と思った途端、そんなことを考える自分に違和感を感じた。

「いつもお姉さんの話をしてくるんですよ、あいつ。それで僕、時々からかってやるんです」

「え、私の話？ ミユキさんの間違いじゃないの？」

そう言いつつも、内心ちよつとドキドキしていた。何を言ってるんだろう。

「話がちよつと長くなりそうだから、そこに座りませんか？」

春木君がそう言つて工事現場の柵をくぐつた。柵の向こうに手頃なベンチがある。私も何だか足が疲れていたので、続いてくぐり、年期の入つたベンチに腰掛けた。

座つてはみたものの、なぜか話し出すこともなく、時間だけがゆつくりと過ぎていつているように思えた。

（そろそろ暗くなつてきたし、帰ろうかな）

「あの、この話はまたこ・・・」

ギギギギギ、ギギギギギ・・・。

隣を見ると、春木君が俯いたまま、ベンチに両手のツメをたてていた。金属つばい嫌な音が響き渡る。

私は怖くなつてすぐにベンチから離れた。それでもそいつはずつと音を出し続けている。向きを変えて柵をくぐろうと中腰になった。

「帰さないよ、ギヒヒヒヒヒヒ」

本屋の時と同じ声だった。いつのまにか肩を強くつかまれ、身動きできなくなつた。

人は本当に怖くなると、声が出なくなるようだ。私は口をパクパクさせながら、入つたこともない敷地にズルズルと引きずられていった。

（助けて！助けて、ジュン！！）

「怖いかい、え？これからもつと怖いことが起こっちゃうんだよ」
そいつの顔を見ると、口がありえないほど裂けていた。目が灰色に濁っていて、どこを見ているのか分からない。

私は夢中でジュンの名を心の中で叫び続けた。

「グワッ！！」

気味の悪い声の後に体が自由になつたため、何が起きたのかと周囲を見回した。

そこに奇跡が起きていた。ジユンがそいつを足で地面に押さえつけている。

「ど、どうして分かったの・・・？」

私は嬉しくて、ちよつと鼻声になりながら聞いた。

ジユンは、こつちを横目で見ながら、

「知ってるくせに」

と言った。

（ああ、やっぱり私の思っていることが分かるんだ。どうしよう、困ったなあ）

「おいお前ら！いつまでも良い思いでいられると思うなよ、必ず食ってやる！グヘエエー！！」

途中でジユンに目を塞がれてしまったので、次に目を開けた時には、もう春木という男は動かなくなっていた。

「殺したの？」

「ああ、でも、誰も悲しんだりしない」

ジユンが冷酷なことを言うので、私はやけになった。

「どうしてそんなことが分かるの？この人にだって親や兄弟がいるんじゃない？」

あんなに小心者で優しくった弟が、まるで別人みたいだ。

「・・・そんなものはないよ。こいつはユイカを襲うために作られたんだから」

（え？何を言ってるの・・・？）

私の様子を見たジユンは、短くため息をついて例のベンチに座った。そして両手の指を重ね合わせ、何やら思案しているようだ。

「ユイカ・・・知らない方が良かったと後悔するのと、知らないまま平穩に暮らす方なら、どっちがいい？」

もちろん普通なら後者を選ぶだろう。誰だって後悔はしたくない、でも、何かすつきりしない。いつからジユンは私を（おねえちゃん）から（ユイカ）と呼ぶようになったのか、そういえばその頃からジユンはジユンらしくなかった。こんなに疑問を持ったままで平凡に

生活できるはずがない。

するとジューンはふっと小さく笑って、目を伏せた。

「それがユイカの答えなんだな、じゃあ説明するよ」

私は今にもやっぱいい、と言いつつになつたが、ここでやめてもいつかまた聞いてしまふに違いない、そう思つてぐつとこらえた。

「僕とユイカは、ずっと昔に恋人同士だつたんだ。神様が地上に住んでいる時代に、いろんな神様の手助けをしている人達がいて、僕達もその仲間だった。僕とユイカはある小川の女神様の手と足となつて働いていた。で、次第に僕らが親しくなつてくると、女神様は冷たい態度をとるようになった。なぜなら、僕は女神様に気に入られていたために、激しく嫉妬したんだ。それでも僕達の絆は深くなつていたので、二人で遠い土地へ逃げたが、すぐに捕まつて、僕達が永久に結婚できないようにしてやると言われた。気が付いたら笹井ジューンとして生まれ、僕達は姉弟になつてしまつた・・・と、いうわけさ」

私は、この途方もない話を素直に受け止めることができなかった。それに、もし事実なら、ジューンが知つててなぜ私は知らなかったのか。そんなに愛し合つているというのなら・・・。

「それは、僕がユイカの昔の記憶を封印したからなんだ」

「どうして知つたらだめなの？」

この時私は、何となく引き返せない状態にいることを悟つた。

ジューンは少し悲しそうな目で私を見た。

「ユイカが思い出してしまうと、もう一緒にはいられなくなつてしまふから・・・。でももういい、今まで一緒にいられたんだし」

何か言わないとジューンが消えてしまいそうな気がする。

「ねえジューン、小さい頃すごい弱虫だったでしょ？どうやって強くなつたの？」

「弱虫じゃないよ」

「だって、いつもお母さんの後ろに隠れていたもん」

そつだ、あの時の私は、いつも弟がついてくる度に隠れていた。
「ユイカを襲おうとしていた存在が、僕にはいつも見えていた。初めは怖かつたけど、すぐに守らなきゃと思つて見張つていたつもりなんだけど」

ジュンの目から、小さな涙がこぼれた・・・それを見ると、頭の中で滝のようにいろんなことが次々と蘇つてくる。

私は何のためらいもなく、ジュンを抱きしめた。ジュンも、痛いほど抱きしめてくれた。

「さようならユイカ、そばにいられないけど、ずっと愛してるよ」
「お願いジュン、また私の記憶を封印して！」

ジュンはうなずく代わりに優しくキスをして消えた。

ジュンが地上から消えた途端に、また元の平穏な暮らしが始まつた。きつと女神様の怒りが収まつたんだろう。ジュンという存在は、誰の記憶にも残つていなかった、そう、私以外は。

(ジュン・・・ねえ君は一体どこにいるの)

・・・おわり

（後書き）

読んで下さっておりがとうございます！一言でも良いので、ぜひ感想をお聞かせ下さい！！
いろんなジャンルを書いてみたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172a/>

ねえ君は

2010年12月18日17時40分発行